An IAMAS Project.

Neo Co-Creation

FIELDWORK

越波
黒津
上大須

2016 / 2017

越波
上大須
黒津

Neo Co-Creation

First and foremost.

A huge THANK YOU to all the local Neo residence who have participated in this project. Without your kindness and help we would have not been able to achieve and learn so much.

INTRODUCTION

根尾コ・クリエイションプロジェクトでは、集落でのフィールドワークでみつけた根尾の生活文化や自然、伝統などをクリエーターたちそれぞれの視点や技術で見つめ直し、新しいモノやコトを提案することを通じて、私たちのこれからの生活文化について模索しています。2015年からの2年間では、奥三区とよばれる根尾北限の集落を中心にフィールドワークを行ってきました。

越波、黒津、大河原、それに続く上大須へ。福井から温見峠を越えるあたりに位置する集落では、現在、ほとんど住民がいなくなり、わずかに通いで住む人たちがここを維持しています。朽ちかけの民家は草木で見えなくなり、かつて植えられた杉たちは伸び放題。人よりも猿や鹿に出会うことが多い道路。まさに自然の状態に回帰してゆく途上のようですが、そこには1300年もの間、人々が営なんできた暮らしと文化がありました。孤立した場所であるが故に、何でも自分たちで作ることが当たり前であり、生きていくためにクリエーターであることが求められていたことがわかります。そして、それは独特の文化を生んできたのです。

フィールドワークを通して出会った人々は、70年から80年と、自分の生まれた地の文化や、自分が築いてきた暮らし、そして豊かな自然を残そうとしていますが、それは「保存」という営みではなく、新しい可能性や未来へとつなぐ創造的な活動だと感じます。

この冊子では、私たちが根尾の北限でみつけた地の文化と素晴らしい創造力を少しでも伝えることができればと願っています。

Oppa

越波

越す波と書いてオッパと読む。福井から温見峠を越え大河原に入り、そこから根尾の東側へと向えば、必ず通ることになるのが越波集落である。木々が季節ごとに色づく山々は絨毯のように美しく、細い獣道を分け入って進めば、神聖さを感じさせる白滝が現れ、ひと時の癒しを与えてくれる。500年もそこに立ち続ける栃の木の根元で人生の道程に思いをはせ、気付けば自分の来し方を省察してしまう。

1300年前の入植以来、人々はさまざまな暮らしを営なんできた。それを今も守っているのが松葉兄弟だ。弟の三郎さんは越波を伝える伝道師。学生やクリエーター、記者やビジネスマンなど、さまざまな人たちと交流しながら、越波が持つ魅力や可能性をプロデュースしている。86才の兄、五郎さんは根尾の数少ないアマゴ養殖家で、企業家として新ビジネスを立ち上げると意気軒昂だ。時代の流れの中で艱難を越えて、今も挑戦を続ける二人に越波という名前がオーバーラップする。

山を越え、嵐を越え、時を越え

越波の人たちはこから来たのですか？　土着なんですよ。1300年前。先ほど僕たちが橋渡ったじゃない、あれから千メートルくらい行ったところに、最初に来たのが上屋村という、そこが歴史上で一番古い。1300年前にそこに私たち越波の先祖が住んでた。1300年前に洪水に村があって逃げて、僕たちが遊んだ、あそこ蛇池、そこへ一旦新しい村作って。そしたら、また水害にあって。そこからはもう神話になってるんですけども。村が沈んで池になってもうて、おそらく地震か何かで堰き止められて池になっちゃったんだと思うんですよ。思うだけなんですけど、そっから蛇池という名前ができたんだと思うんですけど。そこも水害にあって、ここへ逃げてきた。ここに最後落ち着いて今日に至ってる。ここが一番水害が少ないということになったわけですね。1300年前からの歴史というと、どういう人たちが入ってきたのかわからない。歴史に何にも載ってない。ですからオッパという名前は、波が越すと書く。こういう目に会ってきて。

何やって食べていたんでしょう？　農耕だけですね。石をのけて土だけにして、粟とは稗とか小豆とか撒いてね。それはずっとやってましたね。僕が子どものころは、この辺はみんな畑だったんですよ。杉の木が植わっているところも。米は平地の水のあるところ。上屋村とか、さっき僕たちが駐車したところ。向う谷の入り口があるけど、あそこは全部田んぼだったんですよ。山畑。木を切って、ただバラ蒔いておくだけで。山畑って一旦焼くんですよ、草を刈って。肥料やらなくても草木の萌えた灰が肥料になって翌年になるといい土になる。

福井と交流があったんですか？　福井との交流は激しかったですね。ここは道がずっと大須まで続いていて、福井県から入っていて、海の幸ですね、サンマとかサバとか、だからここはサンマ街道。塩サンマ。塩漬けにして行商人が担いでここを歩いてくる。来るうちに傷んじゃう、三日も四日も歩いてくるんですから。氷のない時代ですから。大河原、越波、大河原で売りさばいて帰ると。サヨリ街道って言ってね。サンマのことをサヨリって言うんです。「さんより」っていう踊りがあるんですよ、根尾に。一番メインの踊りなんですよ。さんより街道。いの一番に出る歌なんですよ。「さんよ～り～さんより～、さんよ～り街道、いわしが通る～」。海の幸ばっかの歌なんです。「さばもでてみよ、あじつれて」とかね。さばと言うのは男ですね。さばと様とかけて。おじょ連れて、アジ、おじょというのは娘という意味ですね。サンマの街道でイワシを売る。男も連れて娘を連れて行こう。

越波にも戦争の影響があったんですか？僕の記憶がある中では、昭和16年生まれですから。太平洋戦争が勃発した年なんですよね。その年に生まれてますから。4歳の時が終戦ですから。その頃からの記憶はあるんですよ。終戦というのは聞いているんですよ、わかんないんですけど。3歳の時に最後の兵隊さんがでていくのを覚えていますから。岐阜の長森の68連隊入れられると。地区によって、越波は全部68連隊に入れられる。地区割りにね。歩兵隊に入れられてあそこで教育受けていくんですよね。兵隊さんが村からでてく、というのは、みんなが日の丸の旗持ってね、ここにタスキ掛けてね、自分の名前書いた。紅白のタスキ掛けて。で、越波橋の近くでお別れするんですよ。あそこまで太鼓叩いてね、ドーンドーンと、みんなで送るんですよ。お国のために兵隊に行くんだと。軍のトラックが来てましたね。兵隊乗せるトラックが、蛇池まできてましたね。あそこまでしか入れないから、軍のトラックでてましたね。僕が小学校一年生のとき、授業やってるとね、先生が急に「みんな起立」と、「誰々さんうちに帰りなさい。今お父さんが亡くなったと戦死したと連絡が入りました」と。戦争終わってからですよ、はっきりと戦死したとことがわかって。亡くなったのは3年前ですから、亡くなってから来たと。みんなが泣いてね。　人がいなくなったのはいつ頃からですか？一番多い時は230人くらい人口いましたね。生徒が72~3名いましたね。賑やかでしたね。昭和34年ですね。伊勢湾台風と、それから2年ぐらいたってまた集中豪雨があったんです。2年続けざまにきたんですよね。伊勢湾台風よりもっと大きいのがでたんですよ。それでもう、道路が寸断されてしまって、もう人が住めないと。それで自衛隊がきて、ヘリで物資運んでくれて。蛇池におりて、河原におりて。僕たちかり出されて、川にこんな板の橋があって、渡る時にすごく怖くて、米を40キロ背負わされる。まだ子どもでしたからね。中学生でした。中学3年の時だったかな。あっ、高校3年だ。夏休みにここに来てたら集中豪雨にあって。うちに誰もいなくて僕に行けって。怖かった。。。
それを境に、ほとんどこの村から出て行った。この界隈の人たちはみんなそう。特に越波、大河原、黒津は早かったですね、集中豪雨から。雪崩のように都会に降りてった。

ちょぼはみんなやってたんですか？ 村でやらない人は、まずお寺の坊さんぐらいでしたからね。やっぱり坊さんやるべきじゃないと思いますけど、袈裟着てやっとたら。。。子どもなんか、ここ通りながら「お父ちゃん、儲かっとる？」ってもんだ。　借金する人が身近な人なんですよね。そう、顔を知ってるから。「お前、3年前に貸したやつあれどうなってるんや」ってなもんでね。なし崩しになっているようなものも結構ありますね。　そういうのところがいいですよね。ここの中ではね、長がそういう歴史があって、村の長になる人は、昔こういうことがあって、それもここの中で止めたんだから、今度の事件でもどうなんだろうと。わざわざ法のところに出さなくてもいいんじゃないかと。樽見の村長さんに一遍相談しとくわと。根尾の村長さんですよね、そこに内緒で相談にいあったり。越波で起きたことだから、俺が口を塞げばここで止まるからということで。長の言うことは絶対という文立があったんですよね。村の中にあったんですよね。　長はどうやって決める？　主だった人が、昔からの名士と言われる人がこの中に7～8人、30戸のうちで。その人たちが寄って、まあ持ち回りみたいなところが多少ありましたけども、あの人がいまの時代にあっているというようなところで選んでいく。年も大体50以上の方が長になるということで、下を押さえつけらえるだけの、論破する人もいなけりゃいけないと。ある程度顔も下できく、抑えもきくような人だと。　普通聞いた人が外に漏らすこと多いのにそれがないのが不思議　情報がとりあえず黒津へ伝わるのは一ヶ月くらい経ってだとかね。それはもう、村の中で。黙っとれよ、ってなもんで。しゃべるとすぐばれてまうで、誰々がしゃべったって。情報は黒津までで、交流は黒津、大河原とこの三つは交流はありますから、ある程度の情報は漏れるんだけども、そっから下へ行くには、もう時間がかかるんですよね。ちょぼはいつまでやってたんですか。　ある日突然やらんくなった。バブル弾けたんですね。バブル長かったですね。それまでやってました。それから金銭感覚が下がって、ぴたっと止めましたね。
ちょぼは文化ですねえ。　あれは表にならないオッパの文化なんですよ。僕に言わしたら。あれがなかったら村中寂しい思いしてたと思うんですよ。だって、みんなそれ目的でここに来たんですから。二十歳をすぎるとみんな安い給料をこつこと貯めてね、それか人から借りてでもくる。みんなサイコロ持ってましたからね、各々。ここでもちょぼのルールとか、振る舞いとかあるんですか？あります。個性がでますね。命がけとかね。血を引くんですよね。男四人兄弟が来ると、4人とも6にはるんですよ。親の代から6が好きとか。6に一杯はってあるなと、「お前ら6に張ったやろ」というと、「そうや」と。胴が回ってくるとね、ふせるでしょ、親が。ぽんっと、サイコロいれて。そこのうちではね、いれると手が震うんですよ。「親に似て、あいつもほら、手が震えてる」とみんな大笑いするんですよ。それもまた笑いのネタでね。「ほんとに震えってるな。びびるなよ」って。　采配は？　中盆がおって、中に立つ人がおって、計算役なんですよね。見ただけで、「そこの6の目、ちょっと重すぎるぞ、減らせよ、分散やぞ」要するにマイナスになるよということですね、配当が。もうそんだけお金ないよと。意味ないよと、分散になるよと。配当少なくなるよと、ちょっと引けよとか言ってね。あとどこが軽いの、2が軽い、そんなら2へいくわとかね。見た目でね、なんぼ張ってる？張りすぎじゃない、幾らやってトータルして、そんならあかん、分散やぞ、分散覚悟ならば置いとけって。

仲介役が難しいんじゃないですか　それが3人も4人もおるんですよ、村の中に。そういうことだけ計算早い奴がおるんですよ。普通の計算だめだけど、夜になると途端に計算が強くなる。そのことになるとものすごい集中力が上がる人。普段全然だめなんですよ、夜になると、博打の看板みたら頭が冴えてくるんですよ。中盆といって、中に立つ人。その人が「勝負」って言うんですよ。勝負って言ったら手引けっていうんですね　喧嘩とか起きないのですか？「お前ら何考えとんのや」みんなにボコボコに、まあボコボコにはされないけども、そういう雰囲気ですから、喧嘩を始めたら俺が悪いと。その場で、「お前文句あったら帰ってけえ」って言われますから。「うち帰って寝とれ」って言われますから。だから、そこまでいかないうちに、言葉も引きますし。一旦、雰囲気悪いなと思ったときには。サイコロは誰でも触れるんですか？　5万円以上持っている人じゃないと。胴のお金がいりますから。5万円以上持ってないと権利がないんですよ。元金、5万円僕がここに置くでしょ。中盆に任せるんですよ。中盆が「五万円だ」っていうと、これ株で、それにみんな「俺も乗った～」って言ってくるんですよ。その会社儲かりそうだから、儲かると配当もらえるから、みんな乗るんですよ。「わし一万円乗る」「一万円乗る」と。5万円に大体10万円くらいの胴になるんですよ。

いつ頃始まったんですか。 大昔からです。らくらく明治。だから、博徒があった頃からですから。国定忠治があった頃からですからね。 越波はどこでやっていたんですか。 持ち回りでね。寺銭が入るからね、結構やりたい人いるんですよ。寺っちゅうのは、昔、警察が入れないのがお寺だったんですよね。お寺で博打はやってたんですよ。それからきた寺銭で。寺銭は胴が経ったら一割。胴がたったらというのは、5万円の胴が10万円になったら一割。ですから五千円。やりたい人が4～5件あるもんで、誰がどこでやるのやと。口出しできんしなあと。あいつもやりたい、こいつもやりたいでなあと。そのうちに知らん間に裏で話がついて。そうするとここで若い衆がね、夕方になるとね、大きい声でね、僕のうちの方向いてね、「今晩どこそこやぞ～」って。「あそ～」って。大体夕方7時くらいから始まる。明るいうちから始まりますからね。それを「しょうげんじ」という名前でね。「しょうげんじが来たぞ～」って。村の振れ役って意味なんですよね。

寺銭をもらう人の義務は場を提供する以外になにかありますか？
場所替えとお茶を出すことと、それから、今だったら弘法芋をきちっと煮て、みんなが食べられるだけ用意して。そういうのをちゃんと寺をやるひとが準備しておかないといけないんですよ。みんなが思いっきり食べられるように。あまり酒はすすめないですよね。場所が狂っちゃうから。程度にしておかないと。体にも悪いしね。
弘法芋食べながら博打って健全な感じ。　ご馳走ださないとみんな文句言いますからね。「も少しマシなもんないのか」って、「寺銭みてみろ」って。寺銭の箱があるんですよ。寺銭の箱をみて、「どえらい入ってるやないか」って。だから、お母さんも協力するわけですよ。家中で。稼ぎ大きいですからね、一晩で。

End.

Kurodu

黒津

山奥の黒津集落の住民は85才のおばあさんひとり。「ひとりで寂しくないのかなあ」。初めて黒川光子さんに会ったのは2015年の初秋。野菜を植え育て、あまごを飼い、森に入って薪を割る。車や携帯電話はないが、カラオケセットでひとり唄を楽しむ生活の何と凛々しいこと。誰もが圧倒される。

訪れた時、畑で採れたての弘法芋を大なべに放り込み、鷲掴みした塩を入れて炊きあげて器によそおい、仕上げに自家製エゴマ味噌をのせて出してくれた。薪ストーブを囲んだ大きなテーブルについて、みんなで、串にさされた弘法芋をハフハフ頬張る。「おいしいだろ。ここら辺のは味が違うんだよ」。この温かな満足感が思うたび心に去来する。

「光子さんまた来るね〜」と言ったら「今度来たらあれ食べさせるっから」と暖かな一言。それに甘えて、私たちは時々お邪魔している。積雪で国道が閉ざされる冬時分、光子さんは山を降りて里山の春を待つ。春に光子さんが黒津に戻るのが待ちどおしい。「ひとりで寂しくないのかな」と思ったことはすっかり忘れてしまった。

暮らすということ

この大きいやつだね。よいしょ。その一本じゃ燃えんよ。太いやつで重いやつ置いといてな。ここら辺でこういうこと、私しかようやらんわ。毎日毎日（風呂沸かす）。1人でね、5分も入っとらんのにね。上に出るでしょ、外から煙突。こういう大きいやつもの入れてね。なか燃えるよ。これでもう沸くの。これでね、お湯が煮えてくると煙突がダダダダダッって音してあがってくよ。湯気でてるやろ、あそこから、ダーって湯気があがるんやて。

ちょっとずつ行かにゃ、歩けへんの。ちょっと行っては休まにゃ歩けなんだ。そんでもね、よじ登って薪も割るんだし、チェーンソーも使うんやし。腰は山に入って治す。

おばあちゃんね（松葉三郎さんの母。96才まで1人で越波に暮らしていた）、面白いことがあると、「みっちゃん、明日の朝来い」って言って電話切ってまうの。「みっちゃん、明日の朝来い」って切ってまって、あんまり聞けないし。わし単車に乗っとったやろ、単車に乗っていったら、「まあきいてくりょよ、五郎（三郎さん兄）の言うことこと」て。「これはおれ死んだら言うとくれよ」って言うてね。五郎さんには去年か一昨年ゆうたて、おばあさん、そう言うたやぞて。

私さ、自分の子どもが三つか四つの時に死んだんやて、死んだとこみて、それからちっとも怖くない。自分の子どもが、今おりゃ、70か60いくつかね。その子が三つか四つの時に死んだ。その子を見てから、死んだのをみてから、もー外もよう行かなんだのが、暗闇でもそこ行けと言われたら行くよ。この間も宇佐美さんの戸を開けたのを忘れてね、寝床に入ったけど、閉めたかどうか忘れて、まあ行ってみようと思って、暗いけど。懐中電気だけもって行ってきたよ、締めに。わーって開けてきたの忘れて、夜9時だったけど閉めてきたよ。怖いたって仕方にゃーで行っちゃうなあ。

私、6月ね、朝6時半に越波と大河原の下を歩いてくるんだって。ししにしては黒いなと思ったら、こっちにこう回ってくる大きいの。あれ〜!っておっきな声だして、熊もへーってびっくりして、上ってしまっての。私の出会ったの大きかったよ〜。

芽がようけ出て、この頃みいってきたから、あんまり照ったもんだからね、かやって、紫がかって、色が良くなって、なっとるかなあって自分でこうやって畑歩いて、太い紫色のこうやったり、こわそうなやつは、こりゃいかんなあとか、こまきゃーやつはずっと、これはこまきゃーけどいっぱいなっとると自分で畑行って見て楽しんどる。

それは、みんなも炊いてみるんだけど、エゴマを買ってするんやで、私入れるほど十分入れんのや。それをね、あっためるほど美味しいんや。それが食べたがるんやみんな。。。。それもねえ、こんな水入れて、クタクタクタクタ煮て、大体火が通った時に、水入れて、その前に野菜入れてな、その時やらかくなって。それから醤油と砂糖入れて炊く。やっぱしベケじゃな、何してもベケじゃなと2人はお上手言って食べたん。

ほんとに1人になったのは、奥に夫婦おったらろ、その人らが病気になって嫁さんもでてってもうて、私1人になった。でも、そうじの人らがいろいろ来てくれてね。その時分はみんな働かなきゃならんで、たまには来るけど、来うへんなんだけども、私ここにおるもんで、この人も定年になってね、時たま来るし。魚買う人も、仕事やめて無職なもんだから、時々くるし。

End.

Kamiosu

上大須

「暮らしの原風景」が残された場所。必要なものは何でも自給自足する。それは食べ物だけではない。ヤカンにできた穴くらいは、小豆と綿を練った「天然のパテ」で補修してしまう。そんな「おおむかし」の知恵が今ここでは生きている。多くのモノが入手困難なためたいへん貴重で、それらが「とっても大切」に扱われていたであろう幼少時代を思い出し、少し気が遠くなるような感覚に襲われた。倉庫や焼却炉も自作する。立派な一軒家を「自作」してしまう兄弟もいる。「これも主人が直してくれたんですよ」と、暖炉を指差した。のぞき窓のガラスが割れてしまい、手作りの鉄板で置き換えられている。「なんでも自分でやらなければ、こういうところでは暮らしていけないんです。」奥さんの言葉はどこか誇らしげに聞こえた。

記録と記憶の残しかた

「インタビュアー」:いつ頃からこっちに一緒に行ってるんですか? 「若山紀美代さん」:この人の父親がやっぱここが懐かしくてこっちの方がいいんで、岐阜の家は隣同士ひっついとるでしょ?本当にあれやわ、やっぱこっちの家はこう隣もないし、なんね、ほでやっぱこっち来たがったから。あのゴヘイさんがねこの人の父親ゴヘイさん。こっちにおったわね。 いらした時はどうだったんですか? ほんでその頃には、ゴヘイさんは主人の妹が今赤坂に嫁いでるんで、その子と2人連れてきてここにおったね。 ここ周りはあんまり人がたくさんいないじゃないですか。そうでもなかったですか? 「若山義光さん」:まあ年寄りが昔は結構なんか各家におったんですよね。そのすぐ下にも。 年寄りが2人住んでてね。この下にね。 これがねこの部落の方言なんです。 方言は私も来た頃にはなんかものすご方言使う若い人がおったんよね。あの子が言うこと。 きつく、きつくあの感じるよね方言使うんわ。これ、上大須の方言っていうのは、基本的にここら辺の人だけにしかわからないんですか? 1つ下の下大須はもうここら辺とはもうちょっと違う。違うんですか? 隣の部落と越波と上大須とはね、言葉は全然違うんですよ。あの、方言も違うし、アクセントなんかも。越波はねどっちかっていうと関西に似たような。下大須は下大須でね、これもあの聞いたことないどこの言葉かな? 若山さんは上大須の言葉まだしゃべられるんですか? 私が来た当時は、みんなまだ上大須の言葉だけでしたね。 アクセントが。 私も、私はやっぱ大垣の方でね育ってるから、はじめは苦になったわね。喋り方が全然違うから。 その当時は苗字が若山と若林でしょ。下大須は10ぐらいの苗字があって、10個ぐらいの苗字があって、それで若林と若山はないんですね。 おお 全然別個なんだけど、あそこに大きな石の鳥居さん鳥居の後あったでしょ?あそこの向かいの辺にあの下大須と上大須のこう棲みわけっていうの、町と町と分かれて、部落が分かれてたんだそうですけど。苗字が全然違う。 言葉も違うんですね。 言葉も違う。 それが面白いですよね。言葉というか。アガっていうんですね、自分のこと。アガっていうかアガ。 イントネーション難しいですね。これ吹き込んだものとかないんですか?これ読んでもらった方がいいですよね。アの字から行きますよ。 お願いします。 アングリクッタ。これはね、思いの外という意味だけど。アミダス。アミダスっちゅうんは考えっちゅうよりも考え出すということやね。アガ。さっきのアガは自分とか私という。アガイ。それ私の家ですということをアガイ。それからアリキっていうのはアリ、アリキはまあこうあの伝達屋ってのが部落にあったんですけど。 何をするんですか?伝達屋って。 あの、区長がね今日はどこどこにお葬式ができたよっていうのをアリキ役の人が1件1件回って歩いて、あの部落を伝達して歩く。 それは誰か決まった人がやるんですか? それは後にはもう誰やったかもわからんですけど、昔はあの多少のね、お礼を出して、まあ女の人後家さんとかそういう人で頼まれてやってもらってたようですけど。アリキ。アリキ。アリキっていう。アリキとアリキっていう。アリキ。アヤっちゅうのがあるな。バカっつうのアヤっていう。阿呆とか馬鹿をアヤって言う。 そういうの絶対覚えちゃうんです。 アヤ言ったって、馬鹿や阿呆や言われたって分かれへんもんね。 アダツキというんだけど、これはしゃべくりのこと。アダツキ? あだついたる、あだついたるのは。そこらじゅう喋ってるアダツキやという。アダツキ。しゃべくり。いるいるそういう人。あっちこっち喋って歩く人。アダツキっていう。おしゃべり。 私聞いたよ、ようね、「あだついたる」って言ってってね、ようおじいさんね。 女の人言われちゃいますよね。 そうそう。アックイ。アックイってのはここかかとのことアックイっていう。アックイ。へえ。 ほんでまあアの字からや、アエちゅうのがね、シバのこと言う。 シバ? 囲炉裏に炊いたり何かする。こういう黄色(曖昧)の。あ、あ、アエってっていう。アエ。 アエ。難しいな。 それからアヤマチ。これはわかりますかね? 間違え? 怪我のこと。 え? うん。どっかで落っこちてアヤマチした。 怪我のことなんですね。アヤマチは怪我のこという。 へえ。面白いな。 アカベはわかるでしょう。晴れ着のことアカベーっていう。 全然わかんない。 アカベー。晴れ着のこと。子どもの。小さい子がなんかのお祭りとかそういう時に新しいのを着替えると、それをとととときですね。もうなんかのときに着てそのあと脱いで片付けてなんかのときにまた出して着る。とときの着物なんかによく聞く。 晴れ着のこと。アケ、アカベーっていう。アカメシはわかる? お赤飯? これは、米のご飯。 ええ!米のご飯。お赤飯じゃないんですか? 白いご飯をあれやわ、アカメシっていう。 なんでだろう。小豆のご飯はあずきめしって言ってた。 白いご飯はこの辺なかったのみんな。 あ、そうですね、さっきのにも書いてありました。お米食べないって。 アカデンキってったら、これは晴天のこと。炎天下のこと。アカデンキ。じゃあ今日アカデンキですね。 からアマちゅうのはいろの、いろの、囲炉裏の上にね、こう棚みたいな綱があって、すのこ敷いてそこでものを乾燥さしてんの。これアマっていう。 へえ。 んとね、アカシっていうのがあるんだけど、これは火つけてね、昔はあの蝋燭も無かったり電灯がないで、あの松の木なんかを細くそれに火をつけてこゆとこ灯しながら歩いたの。 へえ。 提灯も無かったので。提灯は蝋燭の金がいるもんで。 そうか。すごいな。 アカシっていって。た、松明のこっちゃね結局。 そうですね。 あの松明て松明はまあ束ねて使うけど、1本か2本でこう灯しながら歩く。ほんでその昔はまたあの夜なべ仕事するのに皿の上にそういうアカシを焚きながら、火を燃やしながら灯りをとって夜なべをした。山小屋なんかであの稗とか粟とかとってそれを、ま、臼でついて細かくしたりなんかするに、夜なべせんとあかんでしょ。そういう時には灯りがないから松明で。 この辺に電気が引かれたのはいつ頃ですか? これはさん、昭和32年か3年。 結構早い時期なんですね。 早いけど越波の方が早かった。 そうなんですか。アシダラテというけど、これはね、アシナガバチのこっちゃ。アシダラテというんじゃ。アシナガバチのことアシダラテという。 昨日いたね。 それからよく言うね、アゴニチヲツケタってということあるわね。 え? それはね味をしめたということで。顎に血をつけた? うん。 なんかすごい。 なんか良いことがあったら、す、それに乗じてまた同じことをやるっていうような場合。 ふーん。なんかすごい良い表現よね。 それから、アゴタガタツっいったら口が達者でしょ。これはわかるでしょ。 口が達者? アゴタガタツってと言いよる。それからアゴヲクッタって言うやんよ。アゴヲクッタっていう言葉があるんだけど、これ当てが外れた。 ふーん。 からアリャコリャということは、あっちゃこちゃ反対のことをいう。こっちとこっちとアリャコリャだったとか。靴でも反対に履くとアリャコリャに履いてると言って。

上大須の方言

上大須は、越波、下大須と隣接しながら、いずれにも属さない独特の言葉の文化をもっております。平家の落人の部落とか、越前人の入植地であるとか、その他諸説がありますが、確たる証拠はない。上大須語は、実際に部落民同志の会話となると方言にアクセントが加わりますから文字だけでは的確に表現できない部分があります。
昭和40年頃まで日常語として使用していた方言を拾ってみました。

あんぐりくった	思いの外	あきれなどして思わず大きく口をあけたさま。当ての外れたこと。
あみだす	考え付く	こんなに便利なことをあみだした。
あが	自分、私	自分がやるからええ、 あがやるからええ。
あがい	自分の家	あがいへ帰って寝たほうがあんきでええ。
ありき	伝達役	区長が区民に伝達事項があった場合ありき役がふれてまわる。
あや	馬鹿、阿呆	人を卑しんで言う、ドスと強調語を加えてドスあやという場合もある。
あざつき	喋くり	あの人はよくあざついて歩く人だ。
あっくい	かがと	あっくいに、おおきなあかぎれができた。
あえ	柴	いろりで燃やす柴、今日はあえを束ねてはこんだ。
あやまち	怪我	山で転落して大あやまちをした。
あかべい	晴れ着	幼児、幼女の晴れ着、とっておきの着物、いいきもの。
あかめし	米のご飯	今日はお正月だからあかめしを炊いた、あかは上等の意をふくむ。
あかてんき	晴天、炎天下	あか天気に外で働くと、はくらんをする。主に夏の炎天下をいう。
あま	いろりの上の吊り棚	木製の枠の上に、すのこを敷いた吊り棚で、物を乾かす時に使用。
あかし	たいまつやたきつけ	槙や桧を細かく割って乾かし、松明や、いろりのたきつけにした。
あかばち	もんスズメ蜂	屋根裏や木の枝などに巣をつくる。だいだい色と黒の輪模様がある
あしだら	あしなが蜂	屋根裏や石垣などに巣をつくる。巣は大きくても湯飲み位いである
あごに血をつけた	味をしめた	何かをやっていい思いをし、あとやみつきになった。
あごたがたつ	口が達者	あの人はあごたがたつから、言い合いになったらまける。
あごをくった	あてがはずれた	期待していた事がはずれた事、すかくったとも言う。
ありゃこりゃ	あちこち反対	靴をありゃこりゃに履いている。
あんぶめ	虻	あんぶめにさされた。
あけんび	あけび	あけんびが沢山なっている。
あぶる	焼く	お餅をあぶる、おいもをおぶる、
あしなかぼっと	藁ぞうり	かがとの部分のないぞうり、蛙に似ているからぼっとぞうりとも言う。
あぐむ	もてあます	沢山すぎた時、もてあまして嫌気がさす。
あんべいたれる	お世辞をいう	何かをやって欲しいとき下手にお世辞を言うこと。
あて	立木の下側	山の斜面の立木で、根元の下側をあて、上側を身方という。

あ、かわいい。アリャコリャって。 アリャコリャは反対ってこと。アブノコ、あ、アブハアンブデだけか。これね、目をつけるな。 犬でも猿でも例えばアブでもね、後に「メ」を付けることがあるの。「犬メ」とか、「兎メ」とか、「メ」を付けるの。人間でも、あの馬鹿にしている時は「誰々メ」ってって「メ」をつける。ああ、「犬メ!」みたいな。「犬メ」とか、「ヨシミツメ」ってってこうこうやって、あの馬鹿にす、し、してなにしてる時怒る時。 みんなそういうです。言葉の最後にみんな「メ」をつけるの。私の来たとき気味悪かった。みんなしゃべるとね、最後に「メ」がついとんの。 みんな馬鹿にしてるってことですか? 愛着みたいな感じ? あの、人に使う場合はだいたい目下の子どもとかに言う。大人に対しては「メ」はつけない。ああ。なるほど。確かにみんな「メ」ついてたら気になりますよね。あー、うん、まだ使うかもしれん。 子どもができとるでね。まあ、あとはアケンビはアケビのことやし。アーブメってのは今言った「メ」を付けるけどアブのことになる。あ、あああ、アシナカボットっと言ってるんだけど草履のことなんだけど。あのね、船頭さんが履くようなあの船頭さんはね、こっからこんだけしか草履がないからね。かかとがあらへんの。 ふーん。濡れちゃうから? うん。アシナカテというんだけどあれを。んで、アシナカボットっと言うんだけど、これはね、ヒキガエルに似ているからボットってっていうんだけど。ヒキガエルもボットってっていうんだよ。 ボットテ? ボット。ここら辺で、カエルのことボットっていう。 へえ。ボット。 ボットはカワ、カエル。 徳山ではホットっていうけど、ここじゃあボットってという。カエルのこと。その辺にボットメおるわっていって。
ああ、なるほどね。 アゴムっていうこともわかるでしょ。持て余すこと。え? 「他のインタビュアー:」アノウ? アゴム。アゴ、アゴム。持て余いて、言わない? 言わないですね。 言わない。全くわからない。余っていること? うん、余るとか。アゴムっつって。ああ、アグムだ。アゴムだと思ってた。これはわかるよね、アンベンタレルことは焦りよること。 言わないですよ。 言わないよ。 アテ、アテっちゅうのは木がこうやって山に生えてるとこの、斜面の、こうやって生えてるとこのこっちゃ側をアテってという。こっちゃ側をミカタテってという。 裏と表みたいな? うん、裏と 谷側と山側? そやね、その斜面にね、こうやって木が生えてる、こうやって生えてるとここっちの山へ向いた方をミカタテっていうし、こっちをアテって。後ろという意味。はい。 後ろと前。 アテが山側? よ、よく言われてる。

大変だねこれ全部やったら。全部いつかやっていただいたらすごくいいな。うん。発音だけじゃなくて、意味とかそういうの聞くと面白いよね。　意味は書いてあるけど。　いや、やっぱりなんか説明してもらう方が。　イントネーション。　ね、すごい面白いね。またお時間あるとき全部お願いします。　もうほとんどすたった言葉なんですよね。その道具なんですか？　ストーブの上にこうやっておいて、ここでお餅焼いたりなんかね。　あ、そうなんですか。ストーブにひっつくでしょ？それでここにアルミホイルを引いて、もち焼いたりなんかする。　ストーブ見に行ってもいいですか？みんなみたいでしょ？あ、あのストーブだ。　家に入ったおばさんたちアイディアマンやいうとるわよ。　本当そう思う。　ほんでこれは大きなもんでも入るでねここへね。これ薪も自分で？　そっからそこに組んであるでしょ？　自分で切るんですか？　あの、間伐したやつをね。あちこち間伐して、この頃間伐したやつそのままほかってあるもんでね。昔はよく売れたけど。今はもう間伐したやつそのままほかってあるで。それここもガラスやったんだけど、ガラスが切り割れて5つぐらいにこうやってひび割れてまったでしょ。それこれ主人これこのこういうやつこれを切ってね。でねこのガラスなんかもうあかんでストーブ変えたんやかな思っとったの。そしたらガラスだけ火が燃えるのこっから見えるでいいのね。もうこれをきっておじいちゃんこれ作ったんやけど。　上手。　そんでもう火は見えないけど、火が見えんとあの、これねトタン切ってね、ガラスが5つか6つにこれヒビ入ってまってね。ほんでこりゃあまた買わなあかんなって思っとったらおじいちゃん緘口してね。すごいいいよね。　今燃えとらんよ。このストーブどこで？　ホームセンターで。岐阜でね。　可愛いよね。　そうそうそうそう。ほんで寝る時なんかはここをうんと閉めとくのね。で、ここだけここにも穴があるでしょ。空気穴が。ほんでこそこそこそこそ燃えとで冬寒い時なんかはね、結構ここはあったかいよね。　じゃあ、冬このストーブと、あと部屋とかにもストーブ置いてるんですか？　これだけでね、これだけ。うん、閉めているとものすごいあったかい。ああ、そうなんですか。家寒なった、秋寒なった頃にでも岐阜よりこっちの方があったかいんね、家ん中は。　岐阜では、岐阜ではね、あのエアコンつけてあってその部屋だけでしょ。ここのは全部。あ、これであったまっちゃうんだ。すごいね。　秋寒なってからやとこれで炊くとものすごい暑くなるから、網戸開きっぱないとダメなんですよ。　冬なんかでも、あれやね、おじいちゃんがホームセンターで買ってきて自分で作って。

NO 1

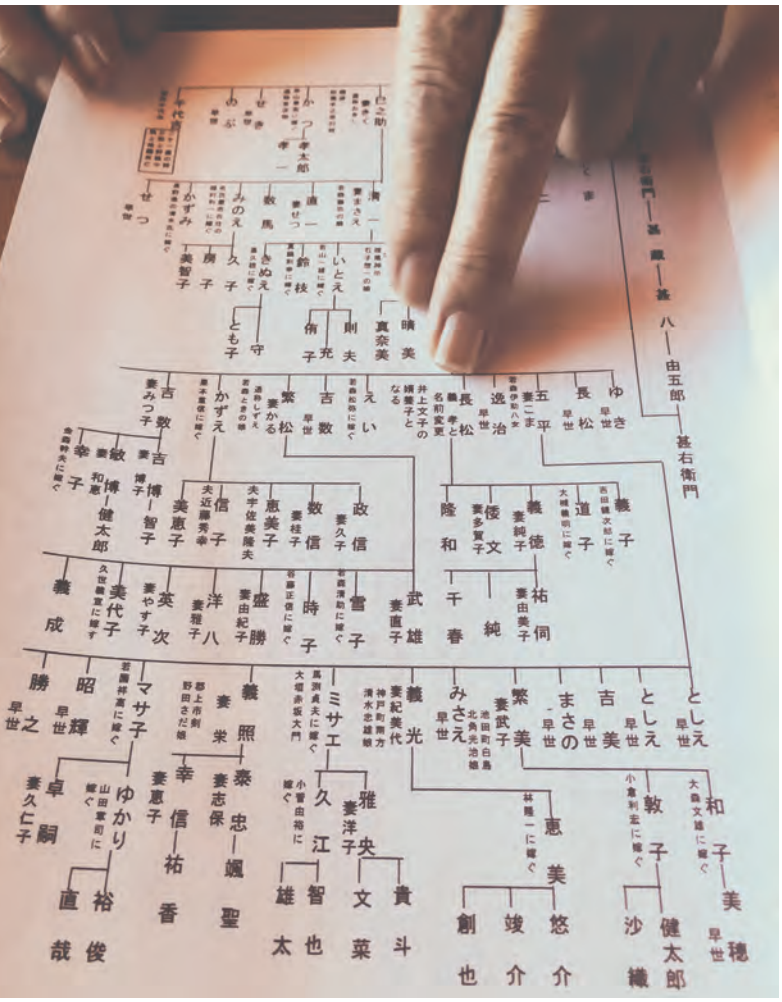
明治二十三年　上大須戸数　三十六戸

若森徳五郎
若森十五郎
若森兼弥
若森庄九郎
若森佐左衛門
若森喜助
若森伊三郎
若森松太郎
若森庄左衛門

若森喜左衛門
若森喜之亟
若森治三郎
若森増太
若森佐助
若森初太郎
若森太右衛門
若森伊助

若山忠左衛門
若山甚右衛門
若森半三郎
若森治九郎
若山松之助
若山庄之助
若山惣五郎
若山熊太郎
若森休右衛門

コクヨ　ケ-30　20×10



なんでもやるんですね。　組み立ててね、お風呂のハコッカワ（曖昧）のやつでも、あの蚊や蠅が入ってくるでしょ。で、おじいちゃんが組み立ててね、ホームセンターで買ってきて組み立ててこうやってつけたの。 この椅子すごいですね。 こここうやって木打ってね。そしてこれ。お父さんのアイディア？すごいね。ほれからね、これここでここでミーちゃんが遊んどった。爪研いで。 あ、爪研いでんの、猫？本当だここに確かに爪研ぎのあとあります。 ここに爪研ぎ、爪研ぎ置いてあるのに、これに何もしないでここでやるのよ。 これは一石二鳥だ。　このこれが高いらしい。1つ500円くらいするらしいで1脚2000円かかっとる爪研ぎ。 面白い。 重いでしょ。横にもこういう風に動かせないしね。 ずっていうしね。ぎっていうから。これは考えたな。 すごい。あのストーブもいいですね。　まあ結構長い薪が入るので。うん、大きいの。最初あのダル、だるまストーブっちゅうやつ使ってたけど、木を上から入れなでしょ。そうすと蓋取ったときに煙がうわぁって吹き出して。あの、埃が立つからあの横から入れるやつに変えたんですよ。 ここの建て増ししたのとかすごいですよ。そこの構造とかすごいですよ。　ああ、これ重さを耐えれるね、ですよね。　これね、雪はね、粘っこくてね、だんだんこうやって降りてきて下へ着くまで雪は綺麗にこう着く。 そうなんですか。 それでこっちから見ると、ここ壁になってるんだけども、それがもう氷になっとって、スコップで刺そうと思っても刺さらないから。

それやっぱ相当寒いからですよね。　寒い。　そうだったら落ちますよ。ねえ、30センチも垂れたら落ちますけど。　先にこう雪の重みがかかっちゃうから、落っこっちゃうんよね。これもお父さんがやられたんですか？　あ、これが？　すごいね。だってこれとこれ鉄パイプだもん。 これ、あ、下はそうですね。 それは、まあ布団でも干した時に。 すごいそれ。 あの辺だってちゃんとブロックの上にパイプがあって。きっちりやってるなって思いましたよ。　結構几帳面だよねやり方がすごく。 丁寧ですよ。 向こうのガードもあれやね女房があの石垣の頭歩くで、コッチ落っこったらあかんと思ってあれ。ガード作って。　やさしい。あの焼却炉も絶対作ったんですよね。　あ、作った。ブロックだけど、ブロックはやっぱ火を炊くと粉々に砕けちゃうの。　そう、弱いからね。中に耐熱レンガを入れなきゃいけない。本当は。 うん。 耐熱レンガを入れて、周りだけブロックにしてるんですか？ そう。 僕も1回調べました。 ああ。中が耐熱レンガなんですね。　これはただのブロックだけだもんで、穴が空いちゃう。しょうないであの煙突を切り開いてね、ぐるぐるっと。 こっちのガラスが割れたから煙突を作ったやつも綺麗ですよね。　あれはね、どういう技術かって言ったら、昔はあのああいうお鍋とか、やかんを、なかなか買うあれがなかったので余裕が。で、破れるとね、あのトタンでね、あのなんていうの補強補強やなしに、修理したの。　靴下が破れたの補修するみたいな感じですよね。 そう。ほんで。 その場合はなんでつけるんですか？ ただあのね、ああそこね作ったる方式であの穴に合わせてピタッと合うようにして、こうってして、あとは豆と綿、木綿とをこうやってカナヅチで叩いて粘っこいあれできてくるんですよ。　うん。あの、コーキングみたいな、コーキング。 豆と綿で？　豆と綿叩いてると。 初めてのテクノロジーだ。　粘ってくる。粘りが出てくる。コーキングですよ。 そうそうそう。 わからない。 コーキングって窓のとこにある。水の入らんように隙間に塗る。隙間にね。 そういう状態のものができるのね。 作物で？　そう。あの豆と小豆と、いやだけど綿とこう綿綿ですよ、綿綿を叩いていると、あのちょっとしたあの布に入れてこうやって叩いててね、何しよると、できる。パテのような感じですよね？ そう。それをあのヤカンとかお鍋の破れたところにあの木当ててはずれんようにして、そこ塗ると、そんで元になる もうそれで大丈夫なんですか？ それで使えてる。ええ、すごいですね。

End.

Special Thanks

黒川光子

松葉三郎
松葉五郎

若山義光
若山紀美代

根尾のみなさん

山口歩那（本巣市地域おこし協力隊）

根尾コ・クリエイション
IAMASメンバー

金山智子
小林孝浩
Gibson, James

後藤良太
ギンイーギョン
加藤明洋

ねおこ